

帝京大学シルクロード叢書 002

シルクロードの コイン 2

山内和也 [編]

帝京大学出版会

はじめに

『帝京大学シルクロード叢書』の第2巻である本書は、ひろくシルクロード地域で見つかるコインを扱った論文集である第1巻『シルクロードのコイン1』の続編で、もっぱらチュー川流域およびタラス川流域のキルギスで出土するコインに関する現地の研究者の研究書および論文の日本語訳を収録している。

私たちが企画した帝京大学シルクロード叢書は、帝京大学文化財研究所が発掘調査を続けているアク・ベシム遺跡で出土した遺物や、遺跡周辺の地形・土地利用に関する研究のほかに、シルクロード一般に関する研究をカバーする予定である。そして、書き下ろしの論文や研究だけでなく、すでに『帝京大学文化財研究所研究報告』やその他の学術雑誌に掲載された論文をテーマごとにまとめて一冊にしたもの、また、アク・ベシム遺跡に関連して、主にロシア語で発表された研究の翻訳をカバーすることも方針としている。旧ソ連領の遺跡の発掘に関しては、地元の研究者やロシア人研究者による重厚な研究が積み重ねられており、ロシア語で発表されたそれらの成果は決して無視することができない重要な資料である。しかし私たち日本人にとってはロシア語のハードルは高いことから、重要な研究成果について信頼の置ける日本語訳を提示しておくことは、今後この地域の研究を進めるためにはまさに焦眉の急である。例えば、日本の中央アジア史研究者がチュー川流域を含むセミレチエ地域のイスラーム化以前の時代のコインについて持つ知識は、突騎施可汗の銘文のある大型で立派な方孔銭に限られるというのが実情ではないだろうか。実際にはそれ以外にも多種多様な方孔の鑄造銭が発見されている。さらに言えば、方孔銭しか発行されていない。それらは文献史料が極端に少ないこの地域の歴史を考える上で極めて重要である。もう一つ例をあげるとすれば、2010年代にはこの地域でカルルク可汗の銘文のあるコインも発見されている。『新唐書』の「西突厥伝」では、大暦年間（766～779）以降、チュー川流域ではカルルクが優勢になったとされるが、これまでそのことを如実に示す証拠は見つかっていなかった。

以下では、第1巻の序文との重複を厭わず、本書が成立した経緯を時系列的

に説明しておこう。文化財研究所の発掘によってもコインは出土しているが、多くの場合、錆びついていて、その型式の同定も困難であった。そのため地元の古銭研究者の研究を参照することは必須であった。当初私たちは、G. L. セミョーノフ (Г. Л. Семенов) が指導して遂行したアク・ベシム遺跡の発掘の学術的な報告書である *Судьба, Ак-Бешим, Государственный Эрмитаж (Россия), Институт Истории НАН Кыргызстана Санкт-Петербург, 2002* (国立エルミタージュ (ロシア)、キルギズタン国立科学アカデミー・歴史研究所『スイヤブ、アク・ベシム』サンクト・ペテルブルク、2002年) に収録された、地元の古銭学者 А.М. Камышев (Камышев) 氏の論文 “Подъемный нумизматический материал с Ак-Бешимского городища (Ак・ベシム遺跡で採集されたコイン資料)” を参考にすることにして、その論文の翻訳をはじめた。非常に興味深く、参考になった一方で、理由は未だに分からないが、本論文で扱われたコインはセミョーノフの発掘で出土したコインではなく、カミシェフ氏個人が収集したものであることに驚かされた。当然のことながら、収集されたコインの場合、保存状態は良いが、出土層位などの考古学的な情報がない。しかも、本論文は彼が同じ2002年に刊行していた А. М. Камышев, *Раннесредневековый монетный комплекс Семиречья, Бишкек, Раритет-Инфо, 2002* (『中世初期におけるセミレチエのコイン—キルギズスタンにおける貨幣経済の始まり』) の記述を簡略にしたもので、そちらを読まなければ正しく内容を理解できない部分があることも明らかになった。この本の方はアク・ベシム遺跡に限らず、チュー川流域全体で収集されたイスラーム化以前、すなわちカラハン朝以前のコインを対象にしている。中でもアク・ベシム遺跡の西にあるクラスナヤ・レーチカ遺跡から収集されたコインは多く、それらを一体として見る必要があることも判明した。

こうして私たちは、カミシェフ氏の著書の翻訳にもとりかかった。この間に、カミシェフ氏本人に連絡を取り翻訳の許可をいただくだけでなく、コインの写真データの提供を受けることができた。また古銭を扱うロシアの雑誌である *Нумизматика* の第 16 号 (2008 年 2 月) pp.18-20 にカミシェフ氏が発表していた “Новые находки раннесредневековых монет в Чуйской долине (チュー川流域における中世初期コインの新発見)” という、アク・ベシム遺跡で一括出土

した60枚あまりのコインに関する論文も提供していただいた。一括出土コインは、特定の時代にどのようなコインが流通していたかを如実に示すことから、アク・ベシム遺跡におけるコインの流通を研究する上では極めて貴重な資料になることは言うまでもない。とりあえず2021年の段階ではカミシェフのこの2つの論文だけを翻訳して『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集（2021年）発表した。その一方で2002年の著書は、イスラーム化以前にアク・ベシム遺跡を含むチュー川流域全体で流通していたコインの歴史的背景についての考察以外に、その時点までに知り得たすべてのコインの原寸大の描き起こし図を含んでおり、一種のカatalogとしての機能も持っていたことから、是非とも日本語版を作成する必要がある。

そのような次第で、本書のもっとも重要な部分は、冒頭に収録されている2002年に出版されたカミシェフ氏の著書の翻訳となる。これがただ単なる翻訳にとどまらないのは、この地域のコインの事情に詳しくない日本の読者の利用の便宜を考えて、多くの訳注を添え、各所に原著にはない写真や図を加えるとともに、原著では小さすぎて見えにくい表を作り直し、いくつかの一括出土コインについては別に表を作成して内容の理解が深まるように配慮しているところにある。またコインの銘文についても、ソグド語の専門家である吉田が新たに読み直して、原著の誤りを訂正した上で必要な注釈を施している。その際、コインの製造技術について論じた部分では藤澤明氏、東洋史に関する部分では齊藤茂雄氏という2人の専門家の協力を得ていることも添えておく。それゆえ、ここに提出する翻訳は単なる翻訳にとどまらない、一種の改訂版になっている。

さらにカミシェフ氏は2002年の著書の翻訳の刊行に合わせて2本の論文を書き下ろしてくださった。その翻訳は吉田が担当した。1つは“Сравнительный анализ монет двух раннесредневековых центров монетного производства в Семиречье (セミレチエにおける中世初期の二つの造幣センターで製造されたコインの比較分析)”で、2002年の著書に収録したコインの出土地に関する考察である。西部天山地方の西のタラズ地域、そしてアク・ベシム遺跡やクラスナヤ・レーチカ遺跡が位置する東側の地域で出土するコインの種類には偏りがあることを示している。例えば、突騎施可汗の銘文を持つ大型のコインは何種

類か知られているが、種類によって二つの地域で出土する数量に偏りがある。カミシェフ氏は指摘していないが、そのことは蘇祿可汗（位716～738）亡き後、突騎施が黒姓と黄姓の二手に分かれて争ったこととの関連を示唆するであろう。もう一つは“Местные подражания китайским монетам династии Тан с городища Шиш-Тюбе (Нузкет) Чуйская долина (Кыргызстан) (チュー川流域 [キルギズスタン] のシシュ・トベ遺跡 [ヌズケツト] で発見された唐王朝のコインの現地模倣銭)”である。この論文は、この地域で出土する分厚い座金（ワッシャー）のような形の、一見するとコインには見えない形状の金属製品が、実は開元通寶の現地模倣銭であることを、原型に近い模倣銭から段階的に形状が変化していることを示して論証したものである。

カミシェフ氏の2002年の著書には、この地域で発行された最後の方孔銭として、片面の四方にアラビア文字の銘文のあるコインも含まれていた。銘文の一部はV. ナステイチ (Nastich) 氏が読んでいる。カミシェフ氏はナステイチ氏の提案に従い、このコインを「プロト・カラハンコイン」と呼んでいる。イスラーム化した当初、カラハン朝以前に存在した方孔銭の伝統を継承しながらも、銘文はアラビア文字を使うという移行期の特徴を備えたコインであるという理解であった。2002年の著書の翻訳の最終段階で、カミシェフ氏から、このコインについての最新の研究があり、実際にはカラキタイ（西遼）のコインであることが明らかとなったことを知らせていただいた。そこで当該の研究者V. ベリヤーエフ (Belyaev)、V. ナステイチ、S. シドロヴィッチ (Sidorovich) 各氏に依頼して英文の論文を執筆していただき、『帝京大学文化財研究所研究報告』に掲載した(“Apropos of so-called ‘proto-Qarakhanid’ coins (いわゆる「プロト・カラハン銭」をめぐる)”)、第22集 (2023年) pp.67-70)。本書に掲載するのはその日本語訳で、ベリヤーエフ氏との連絡をとった吉田が翻訳も担当している。

最後になるが、本書の出版にあたっては、翻訳をご快諾いただいた研究者の皆さまに深く感謝申し上げます。とくにカミシェフ氏は翻訳の出版にあたり、図版等をお新たに提供くださった。ここに記して感謝申し上げます。

はじめに

帝京大学文化財研究所

吉田 豊

山内和也

目次

はじめに

中世初期におけるセミレチエのコイン

A. カミシェフ 著 山内和也・吉田 豊・齊藤茂雄・藤澤 明 訳……………1

アク・ベシム遺跡で採集されたコイン資料

A. カミシェフ 著 山内和也・吉田 豊 訳……………185

チュー川流域における中世初期コインの新発見

A. カミシェフ 著 山内和也・吉田 豊 訳……………221

セミレチエにおける中世初期の二つの造幣センターで製造された コインの比較分析

A. カミシェフ 著 吉田 豊 訳……………237

チュー川流域（キルギズスタン）のシシュ・トベ遺跡 （ヌズケット）で発見された唐王朝のコインの現地模倣銭

A. カミシェフ 著 吉田 豊 訳……………249

いわゆる「プロト・カラハン銭」をめぐって

V. ベリヤーエフ・V. ナスティチ・S. シドロヴィッチ 著 吉田 豊 訳……………271

中世初期におけるセミレチエのコイン キルギズスタンにおける貨幣経済の始まり

A. カミシェフ 著
山内和也・吉田 豊・齊藤茂雄・藤澤 明 訳

訳者前書き

1 翻訳について

ここに日本語訳を提出するのは A. Камышев, *Раннесредневековый монетный комплекс Семиречья*, Бишкек, Раритет-Инфо, 2002 (以下、カミシェフ 2002と略す) である。本書は、キルギス共和国の北部チュー川流域とタラス川流域の遺跡で出土する、イスラーム化、すなわちカラハン朝以前のコインを可能な限り網羅的に扱っている。その頃、この地域はソグド語圏であったから、銘文はソグド文字・ソグド語で表記されていたので、出土するコインはソグドコインとして分類される。本書で扱われているコインの大半は、現在までに何度か発掘が行われてきたアク・ベシム遺跡および、その東に位置するクラスナヤ・レーチカ遺跡で出土している。この二つの遺跡はチュー川流域では東の端に位置している。アク・ベシム遺跡は、唐の時代に碎葉鎮が設置された都市でもあった。一時は唐の領土になっていたから、日本の東洋史の研究者の関心も高い。

従来この地域のコインの研究としては、O. I. スミルノヴァの研究 (O. И. Смирнова, “О классификации и легендах Тюркешских монет,” *Ученые Записки и Института Востоковедения*, Том 16, 1958, 527-551) が有名で、1953～1954年に行われた L. R. クズラソフ Л. Р. Кызласов の発掘によって獲得されたコインを分析していた。その際、発見されたソグド語銘文をもつ主要な 3 種類

のコインの出土状況から、それらの相対年代を決定した上で、そのうちのもっとも遅い時期に比定されるテュルゲシュ・コインの鑄造が蘇祿（位716～738年）の時代であるという前提で、もっとも初期のコインの絶対年代を7世紀末に比定していた。この年代観は、一般に受け入れられ、スミルノヴァ 1981（O. И. Смирнова, *Сводный каталог согдийских монет: Бронза*, Москва, 1981）でも変わることはなかったし、コインの新しいタイプが追加されることも基本的にはなかった¹⁾。

しかし、ソ連崩壊後中央アジアの共和国では、地元の考古学者たちが盛んに発掘を行う以外にも、古銭の研究者たちは必ずしも発掘にはよらない非常に多くの出土コインをも考慮して独自の研究をすすめており、研究の状況は一変した。ここに翻訳するカミシェフ A. M. Камышев の研究はそのようなソ連崩壊以後の現地研究者の貢献の典型的な事例の一つと言えるであろう。上述したアク・ベシムの3種類のコインの相対年代についても、関連する新発見のコインや、これまで知られていなかったバリエントに基づいて、テュルゲシュ・コインが最初であるとするまったく別のシナリオが展開されている。詳しくは、吉田豊「補説：クズラソフ Kyzlasov が発掘したコインの年代と歴史的背景に関するクローン Clauson の解釈の問題点とコインに関する研究のその後の展開」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集, 2021, pp.99-102も参照されたい。そのカミシェフは、在野の研究者ではあるが、チュー川流域出土のコインの研究に関しては実質的に第一人者になっている。そのことは、G. L. セミョーフ Г. Л. Семенов をリーダーとするエルミターージュのチームが1996～1998年に行ったアク・ベシムのキリスト教教会の発掘の報告書（Государственный Эрмитаж (Россия), Институт Истории НАН Кыргызстана, Суяб, Ак-Бешим, Санкт-Петербург, 2002）で、カミシェフ自身は発掘のチームに加わっていないにもかかわらず、出土コインに関する一つの章を担当していることから確認される（A.M. カミシェフ著, 山内・吉田訳「アク・ベシム遺跡遺跡で採集されたコイン資料」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集, 2021, 本書 pp. 185-220に収録）。彼はまた、キルギズスタンの古代から19世紀までの史料の解説書である、*Источниковедение Кыргызстана (с древности до конца*

XIX B.), Бишкек, 2004の、「中世初期の史料」のうちの古銭の部分を担当している (ibid., pp. 148-162)。この本のソグド語史料の部分は V. A. リフシツ B. A. Лившиц が担当し、古代トルコ語史料の部分は S. G. クリヤシュトルヌイ C. Г. Кляшторны が担当していることから分かります。各章はキルギス人に限らず各分野の第一人者が担当しているのであって、カミシェフに対する大方の評価がよく分かるであろう。カミシェフの出土コインに関する研究には、2006年10月にアク・ベシムで発見された62枚の一括出土貨幣に関する論文もあり、こちらも翻訳が発表されている (A.M. カミシェフ著, 山内・吉田訳「チュー川流域における中世初期コインの新発見」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集, 2021, 本書 pp. 221-236に収録)。

帝京大学文化財研究所は2016年以来アク・ベシム遺跡で発掘を継続しており、現在までに60枚のコインが出土している。それらを整理し、出土した層位の時代を判定するためにコインを使う場合には、この地域で出土するコインに関する先行研究を是非とも把握しておく必要があった。その作業の一環としてカミシェフの一連の著作を翻訳しているが、カミシェフ2002はそのなかでも、学術性とカバーするテーマや収録するコインの網羅性の点で、この地域で出土するコインのカタログとしても利用できるもっとも重要な研究である。ロシア語で書かれた研究書は、私たち日本人にとってはハードルが高く、熟読吟味した上で翻訳を提出しておくことは、広く日本の中央アジア史学界にとっても有益であると信じている。

翻訳は山内、吉田、藤澤が行い、吉田と藤澤は各自の専門に近い部分を担当し、山内は翻訳作業全体を差配するとともに残りの部分を担当した。齊藤は主に、中国史や中央アジア史にかかわる記述を原典に当たって調べ、問題がないか確認する作業を担当した。翻訳の担当者はロシア語に堪能ではないため、機械翻訳ソフトを援用して、いったん英訳された文をロシア語原文と対照しながら、内容も考慮して日本語に翻訳している。ロシア語に堪能なこの分野の専門家、私たちの要請によって日本語訳を引き受けてくれる研究者は日本では皆無に近く、この方法がもっとも現実的な方法であった。ロシア語に堪能でも、この分野に詳しくない方に依頼して翻訳してもらった場合、結局専門家が原文と

対照しながら訳文を作り直さなければならず、一連の作業に要する時間と費用は莫大なものになる。ここで採用したやり方は今日の学術翻訳の一つのあり方であり、表立って表明されていないものの、既に各方面で採用されているのであろう。

当然のことながら今回の翻訳では、原著に残っていた誤植などの単純な誤りや、カミシェフの誤解は訂正している。そのために訳注を充実させるとともに、原著にある理解が難しい記述の解説も添えた。読者の理解を容易にするために新たに挿図を加え、必要に応じて文中に [] で補記・補足を追加した。コインのソグド語の銘文は吉田が新たに読み直し、必要な場合には解説を添えた。また著者のカミシェフ氏と接触し数々の疑問に答えてもらったが、その際、個々のコインの写真も提供して下さったので、それらを図版として掲載している。原著の地図、表、グラフは文字が読めない程小さな文字で印刷されていたため、文化財研究所の川口さんの手を患わせて新たに作り直していただいた。そしてこのエクセルで作成した表をもとに、原著にはなかった一括出土コインや出土地別の表（補表）も新たに作成して掲載している。したがって本翻訳は、多くの点で原著より優れたものになったと自負している。何よりも原著はキルギス共和国で刊行され、発行部数は300冊であったから、興味を持つ研究者が日本で入手することは極めて難しかった。

2 本書の内容について

カミシェフは発掘には携わらないものの、長年チュー川流域の遺跡で見つかるコインの収集を行っており、ここに翻訳した*Раннесредневековый монетный комплекс Семиречья*, Бишкек, 2002は、彼の博士論文でもあった。本書を執筆する段階で、彼が参照した所蔵するコインは2500点ほどに上っていた。ちなみにクズラソフが1953年から1954年にかけてアク・ベシム遺跡の5つの地点を発掘したが、その時に得られたコインは全部で177点、そのうち考察の対象にならないカラハン朝のコインは90点である。また1996年から1998年にかけて、セミョーノフによって城内のキリスト教教会が発掘されたとき、獲得されたコインは36点で、イスラーム・コインは2点含まれていた。帝京大学が行っ

た2016～2023年の発掘で見つかったコインは60点であった。このように見れば、カミシェフが参考にしたコインの数量の多さがよく理解できるだろう²⁾。

本書のタイトルにある「セミレチエ」はやや誤解を招く表現である。「セミレチエ」は、本来はバルハシ湖に注ぐ7つの河のある地域の名称であった。帝政ロシア時代には「7つの河」のロシア語表現であるセミレチエ Семиречье を冠する州が設置された。チュー川はバルハシ湖に流入しないが、そのセミレチエ州にはアク・ベシム遺跡が位置するチュー川流域も含まれていた。旧セミレチエ州のなかでは、イスラーム化以前のシルクロード時代におけるチュー川流域の重要性は際立っており、学術書においても「セミレチエ」という名称が、チュー川流域（ときにタラス川流域まで含んで）とほぼ同じ意味で使われることがある。誤解を避けるためには「チュー川流域」という名称を使う方が好ましいが、「セミレチエ」の方が一般に知られていることもあり、一概にその使用を妨げられないという事情がある。

本書は前半で、この地域で活躍した、テュルク族、中国人、ソグド人の歴史の説明に始まり、中国のコイン、ソグドのコイン、セミレチエで発行されたコイン、さらに外来のコインの順に解説する。コインを鑄造するための技術やコインの金属組成についての説明がそれに続く。後半はカタログになっていて、各型式のコインの原寸大の描き起こし図と、銘文や外見に関する説明文が添えられている。重量や出土地に関する情報は、巻末の2500点ほどのコインの表に記載がある。巻末には金属成分の分析表、同じ型式のコインの重量の分布を示すグラフもある。本翻訳ではそのすべてを余すところなく翻訳している。カミシェフのチュー川流域における貨幣流通についての研究でもっとも注目すべき点は、以下のようにまとめられよう。

この地域での貨幣流通の始まりは、唐の碎葉鎮設置に前後するところからの中国銭の導入であり、当初スミルノヴァが想定していたようなソグド本土からの影響はなかった。その後、蘇祿の時代のテュルゲシュが発行した、開元通寶と同じ規格の方孔銭が大量に流通したが、始めは中国の工人の技術援助があったために、その出来映えは非常に良かった。その後、テュルゲシュの勢力が衰え、タラス戦の敗北と安史の乱による中国国内の混乱があつて唐からの影響も弱

まった。ただ安史の乱以降に発行された乾元重寶（758～760年）や、安西都護府で独自に発行された、大曆元寶（766～779年）や建中通寶（780～783年）もチュー川流域では見つかる。

大中小の3種類のコインがあった乾元重寶の影響と、インフレーション進行により、テュルゲシュ・コインの重量や品質が時とともに低下した。そのような過程で、直径が20mm前後の中型のテュルゲシュ・コインが発行され、それと同じ規格で、片面に βγγ twrkyš x'γ'n pny、もう一方の面に wn'ntm'x xwβw 「ワナントマーフ Wanantmakh 王」という銘文と三叉のフォーク状のタムガのあるコインも発行された。wn'ntm'x の読みは吉田が2000年に発表したものだが（Yoshida, “First fruits of Ryūkokū-Berlin joint project on the Turfan Iranian manuscripts.” *Acta Asiatica* 78, 2000/3, pp. 71-85）、2002年に刊行された本書では、カミシェフはスミルノヴァ 1981の読みにしたがってトゥフス Tuxus コインと呼んでいる。このコインとテュルゲシュ・コインの前後関係をめぐる議論は、本書のなかでも論じられている。この点については、吉田の「補説：クズラソフ Kyzlasov が発掘したコインの年代と歴史的背景に関するクローソン Clauson の解釈の問題点とコインに関する研究のその後の展開」『帝京大学文化財研究所研究報告』第20集, 2021, pp.99-102も参照されたい。

これ以降も劣化したコインは発行され続け、1g以下の銘文のない劣悪なコインも鑄造されたし、テュルゲシュ・コインとワナントマーフ・コイン以外のコインも発行されたが、すべて方孔銭（時に円孔）で、その状況はカラハン朝の成立まで続いた。方孔銭の最後は、鑄造の方孔銭でありながら、本来漢字が書かれていた4箇所アラビア文字の銘文を配置したコインで、カミシェフはプロト・カラハン朝 Proto-Qarakhanid コインと呼んでいる（最近の研究については、下記訳註88を参照）。要するにチュー川流域は、カラハン朝の成立までのほぼ200～250年間、ソグド語の銘文を備えた独自の方孔銭が鑄造され流通し続けたという、歴史上極めて特筆すべき地方だったということである。そしてテュルゲシュ・コインも10世紀まで流通し続けていたという。このような状況は、発掘に際して、コインが出土した層位の年代を、当該のコインの型式によって決めることが非常に難しいことを示している。

本書では、この200～250年ほどの間にチュー川流域及びタラス川流域で発行され、2002年の段階でカミシエフが知り得たコインの種類をすべて原寸大で図示しており、現在でもこれを凌駕する研究書は存在しない。スミルノヴァ1981のカタログは非常に優れているが、ことチュー川流域出土のコインに関しては、ほぼ1958年の段階に留まっているから、本書はその欠を埋めているという意味で、ソグド語銘文を持つコインを研究する上では基本書に位置付けられるであろう。

3 おわりに

最後に翻訳者の1人である吉田のこの地域の最初のコインについての考え方について簡単に述べておきたい。

この地域は、古くはトルキスタン Turkistan（ソグド文字では twrkstn）と呼ばれていたというのが吉田の説である（吉田豊「貨幣の銘文に反映されたチュルク族によるソグド支配」『京都大学文学部研究紀要』57, 2018, pp. 155-182）。テュルク系の遊牧民とソグド人が共存していた地域で、広域を影響下に置いた遊牧民と、その緩やかな支配を受けながらも独立していた定住ソグド人の都市国家が存在した。まさに玄奘が言う「素葉より西に数十の孤城があり、城ごとに長を立てている。互いに命令を稟けているわけではないが、みな突厥に隷属している。（素葉已西數十孤城。城皆立長。雖不相稟命。然皆役屬突厥。）」（『大唐西域記』巻1, 『大正』 vol. 51, 871a9-10）であって、このような状況は、実際には、この地域にソグド人が居住し始めた時期から続く政治状況だったようだ。そのソグド人の入植を、旧ソ連の研究者たちは5世紀頃としている。具体的な根拠は不明だが、民族移動の混乱がおさまった5世紀はソグド本土が繁栄し始めた時代であったから、それを疑う理由もないであろう。

出土品で見る限りこの地域に最初に流通した中国銭は、五銖銭であったようだ（カミシエフ2002, No. 1）。ソグド本土の方孔銭の始まりがシシュピル šyšpyr 王のそれで、この王は開元通寶発行以前の隋代の王であるから、彼のコインのモデルは開元通寶ではなく先行する時代の五銖銭であったはずである。したがってソグド人が中国式の方孔銭を導入したのは、隋の時代であったよう

だ。その後は、強大な唐の影響のもと、五銖銭はすぐに開元通寶に取って代わられた。チュー川流域で発行されたイスラーム化以前のコインのうち、唯一の非方孔銭は鑄造銭であり、片面は支配者の左4分の3面観のプロフィールで、左右に βγγ「神、主」と prn「栄光」というソグド語の銘文、ウラ面はタムガである。カミシュフ2002の No. 20がそれに当たる³⁾。吉田はこれが、チュー川流域で発行された最初のコインであったのではないかと考えている。人物は円錐形のとんがり帽子をかぶりイヤリングをしている。これは中国では薩宝とか胡王と呼ばれるソグド商人のリーダーの外見である。都市国家のリーダーでもあったと考えられる。実際、7世紀終わりに唐の碎葉鎮が設置されたとき、碎葉州刺史は安車鼻施という名前の安姓のソグド人だった(内藤みどり『西突厥史の研究』早稲田大学出版部, 1988, pp. 47, 49-50)。商人であったかどうかは、分からないがそれを否定する根拠もない。鍛造銭ではあるが、とんがり帽子の人物をオモテ面に描き、ウラ面にタムガを備えたコインは別にも知られている。中央アジアの古銭の画像を集めている zeno のサイト (<https://www.zeno.ru/showgallery.php?cat=503>) では、タシケント地区の未比定の支配者のコインとして掲載する、#3386, #21182がそれで⁴⁾、ウラ面には特異なタムガが見える。チュー川流域のような植民地域の都市国家のリーダーには、商人が就任することがあったのかもしれない。

チュー川流域に限らず、中央アジアで出土するコインは多くの謎に包まれている。そして今現在もこれまで見つかったことのないタイプのコインが出土している。文献史料が極端に少ないこの地域では、出土コインは歴史を知るためのもっとも重要な資料の一つであり、今後とも最大限の関心を持って研究を進めて行かなければならない。

註

- 1) 例外はテュルゲシュ・コインの Type I~III である(これは Smirnova1958の Type I, II, III とはまったく別のものであるので注意を要する)。従来から知られていた、オモテ面に βγγ twrkyš x'γ'n pny、ウラ面に弓形のタムガを備えた標準的なコインを Type IV と呼ぶ一方、オモテ面は同じだが、ウラ面に、「山」型のタムガとソグド文字で表記された語のような、弓形のタムガ以外の要素を添えたコインを Type II, Type III と呼んでいる。Type I は、オモテ面の銘文は xwt'w wxšw'w pny と

あり、ウラ面には弓形のタムガ以外に「山」形のタムガと「元」という漢字が添えられている。スミルノヴァ 1981の段階では Type I の銘文は読めていなかった。スミルノヴァ 1981は Type I～III とタラス地区との関連を示唆している。これはその後カミシエフの研究によって確認されている。本書に収録されたカミシエフの論文を参照せよ。

- 2) 最近カミシエフ氏から吉田に届いたメールによれば、氏は現在までに5000点ほどのコインを見ているという。
- 3) カミシエフ2002では、No. 20のコインは Φ.C. (= Fan Suluk 「蘇祿の銅銭」) として、蘇祿のプロフィールであると考えている。
- 4) zeno#21578もそこに含まれるかもしれない。